



3月のコラム ～ロシアという言葉から受けるもの～

「ロシア」という言葉から受けとるものが、この数週間で全く別物になってしまいました。新型コロナともウイルスとの闘いではあるわけですが、人間の意思で行っている戦争は、全く異った種類の緊張と動揺、憤りを感じます。

「こんな国なら行くんじゃない」と数年前にロシアを観光した知人が言っていました。ロシアの全ての人々が悪いわけでも全ての文化が否定されるわけでもありませんが、関わりを持つこと自体に戸惑いを覚えるのは確かな感情です。

私が趣味で演劇をしていることは、小欄でもお伝えしたことがあります。コロナがなければ、令和2年に上演する予定だった作品は、「ロシア喜劇 長男」。二年に一度の公演なので決めたのは、令和1年を迎えた頃。その時は、ロシアって“♪♪～パルナス ピロシキ～♪”（若い方には通じませんがご容赦）のイメージだよね」という話題が盛り上がり、なんとなくのんびりしたノスタルジックなものでした。ようやく今年の10月に、上演の予定としたのですがここへきて心がざわつきます。

そんな中、劇団のブログに代表からコメントがあがりました。

・・・この「長男」という作品を書いたヴァムピーロフ(*1937-72)は、幼少期に教育者だった祖母と父親が思想犯として投獄され(恐らくは)処刑されました。「父」を知らずに成長した彼が書いた「長男」は、国家機関への悲しみや怨み、怒りを乗り越え「創造物」へと昇華させて生まれた作品です。サラファーノフ(*登場人物の名前)の台詞「人間は皆、創造者としてこの世に生を受ける…自分の能力と可能性に応じて最高の創造活動を続けねばならん」をヴァムピーロフ自身が実践し、人々に笑いと安らぎを届けていたのだと思います。そのような人物が残した作品を21世紀の日本で僕たちが上演すること。それは、国家の壁を越えた「人間らしさ」の共有を可能ならしめる「演劇の力」をキホーティック(*劇団の名前)メンバーと観客の皆さんとで確かめ合うことだと思います。ちょっと臭いセリフになってしまうかも知れませんが、ヴァムピーロフの思いに胸を馳せつつ「平和」への祈りを込めて「長男」の製作に取り組んでいきたいと、真面目に考えています。・・・(*は補足)

自分の考えや思いを自由に発言できるのも、歌や旅行を楽しめるのも平和であってこそ。「人間はみな兄弟」というセリフもこの喜劇のキーワードです。月に一度の会合というゆるい劇団ですが、四年間温めてきたこの作品を予定どおり10月に上演できますように。

2022年3月 水田かほる